

2025 年度 入学者選抜試験問題

小 論 文

注意

1. 監督者の指示があるまで、問題用紙を開かないこと
2. 解答はすべて解答用紙に記入すること
3. 監督者の指示に従い、所定欄に、受験番号・氏名を記入すること
4. 机上には筆記用具・消しゴム・鉛筆削り・時計および受験票以外のものを置かないこと

受 験 番 号	氏 名

以下の文章は、2024年6月6日に朝日新聞の朝刊に掲載されていた「メダリストに「賞金」、問いかけるもの 世界陸連が初の試み、「金」に5万ドル パリ五輪開幕まで50日」という記事です。この文章を読んで、後の問いに教えてください。

成功すれば億万長者にもなれるアスリート。ただ、五輪は別？ パリ五輪の開幕まであと50日。メダリストへ「賞金」を出そうとする動きに、反対の声も上がっている。

■選手が生んだ収益「一部を還元」 「五輪の独自性損なう」、反対の声も
メダリストに賞金は必要か。

世界陸連(WA)が4月に打ち出した方針が、波紋を広げている。WAはパリ五輪で、陸上の金メダリストに5万ドル(約785万円)を贈る。国際競技連盟(IF)では五輪史上初の試みだ。

WAのセバスチャン・コー会長は意義をこう強調する。

「メダル獲得や、自国を代表するための努力に市場価値をつけることは不可能。だが、選手が生み出した収益の一部を直接還元することは重要だ」

今回の2028年ロサンゼルス五輪では、銀、銅を含む全てのメダリストに賞金を出すという。

ただ、この方針には発表直後から反発の声が上がった。

WAも加盟する夏季五輪国際競技連盟連合(ASOIF)は「全体の利害に関わるものは、事前の話し合いが重要」と声明を出した。他のIFは今回の決定について知らされていなかったという。

ASOIFが賞金に反対する理由の一つが「オリンピズムの価値とオリンピックの独自性を損なう」というものだ。五輪憲章では1974年まで「アマチュア」が参加資格に規定されていた。賞金目的ではなく、メダリストには金銭的な価値以上の名誉が与えられる。今ではプロも参加するが、五輪の源流にはそんな「アマチュアリズム」がある。

選手の反応は様々だ。

「あまり気にしていません。メダルを持って帰ることが目標なので、その中で何かもらえたらいいな、ぐらい」とは、昨年の世界陸上女子やり投げを制した北口榛花(はるか)。東京五輪の男子棒高跳び金メダリスト、アルマント・デュブランティス(スウェーデン)はロイター通信の取材に、「何もないよりまし。前は賞金が全くなかったことを考えると、正しい方向への一歩だ」とし、WAを支持した。

実際には、各国・地域の五輪委員会や国内競技団体からの「報奨金」がすでにあった。とはいえ、WAが国際オリンピック委員会(IOC)から分配金を受け取っている。

各競技の普及、環境整備のために使われてきたのが分配金だ。WAの決定に反対する国際自転車競技連合のダビド・ラバルティアン会長は、「オリンピックの精神は収益を共有し、

より多くの選手に競技の機会を与えること。トップ選手に賞金を集中させるのではなく、分配すべきだ」とロイター通信に語っている。

新たな動きも出てきた。国際ボクシング協会（IBA）は5月29日、金メダリストに10万ドル（約1570万円）を贈ると発表した。IBAはIOCから統括競技団体の承認を外されているが、同様の動きが今後出てくる可能性もある。

他競技の世界大会では、日本が優勝した23年のワールド・ベースボール・クラシック（WBC）の優勝賞金は約4億7100万円。22年のサッカー・ワールドカップ（W杯）では、優勝したアルゼンチンが約65億円超を手にした。

メダルの価値と意義が改めて問われている。（加藤秀彬）

■報奨金、日本では92年に制度導入

日本オリンピック委員会（JOC）からパリ五輪メダリストへの報奨金は、東京五輪と同額の予定だ。金に500万円、銀に200万円、銅に100万円が贈られる。

東京五輪で日本勢は過去最多58個のメダルを獲得。支給総額は4億円を超え、制度が導入された1992年のアルベールビル冬季五輪以降の最高額となった。

国内の各競技団体が個別に支給する報奨金は、ゴルフが金に2千万円、卓球はシングルス金に1千万円で東京五輪と同額。一方で日本陸上競技連盟は今回、「予算不足」を理由に減額し、前回2千万円だった金メダルは300万円となった。

水泳、柔道など一貫して報奨金がない競技団体も。全日本柔道連盟によると、予算を報奨金でなく、次世代の育成に充てることを優先しているという。

結果が出た時点で検討する、というのは日本フェンシング協会だ。報奨金規定はなく、「円安で海外遠征費などがかさみ、選手に自己負担もお願いしている。今はパリで最高の成績を出すことを優先している」と担当者。東京五輪で男子エペ団体が史上初の金メダルを獲得した際は寄付を募り、メンバー4人に計500万円を贈った。

競技団体で差があるため、成績と額は必ずしも一致しない。東京五輪では卓球の伊藤美誠が金銀銅それぞれ1個で計1800万円（うちJOCから800万円）の報奨金を受け取った。金2個と銀1個の体操・橋本大輝は1330万円（同1200万円）、金2個の競泳・大橋悠依はJOCからの1千万円だった。

■億万長者のプロ集うパリ

かつてアマチュアの祭典だった五輪は、「世界最高峰の祭典」を掲げるIOCのサマランチ会長時代の1980年代からプロに門戸を開いた。「市場価値」を高める狙いの一方、IOCはメダリストに賞金を出すわけでもない。それでもパリには億万長者のプロアスリートが集う。

米経済誌フォーブスによるアスリートの長者番付（2024年版）をみると、パリ五輪出場が有望なアスリートで最も稼いでいるのがゴルフ男子で、昨年のマスターズ・トーナメン

ト覇者でもあるジョン・ラーム（スペイン）の2億1800万ドル（約342億2600万円、1ドル＝157円換算）。長者番付では1位のサッカーのクリスティアーノ・ロナルド（ポルトガル）の2億6千万ドル（約408億2千万円）に次いで2位だった。

続くのが、米プロバスケットボール（NBA）のレジェンドで、八村塁のレーカーズの同僚であるレブロン・ジェームズ（米）の1億2820万ドル（約201億2700万円）で全体の4位。

1億200万ドル（約160億1400万円）を稼いで全体の9位、NBAのステファン・カリー（米）も五輪初出場を果たしそうだ。東京五輪のバスケットボール男子決勝は米国がフランスを破って金メダルを獲得した。パリでの再戦が実現すれば、盛り上がること必至だ。

フォーブスによると、昨年、女性アスリートで最も稼いだのは、テニスの世界ランキング1位、イガ・シフィオンテク（ポーランド）の2390万ドル（約37億5200万円）だった。

テニス以外でパリ五輪でも注目の筆頭格は女子ゴルフの世界ランキング1位、ネリー・コルダ（米）の820万ドル（約12億8700万円）。女子全体の11位だ。東京五輪に続く連覇なるか。（稲垣康介）

問 あなたは、メダリストへ「賞金」を出そうとする動きに賛成ですか。それとも反対ですか。最初にあなたの立場を明確にした上で、その理由を800字以内で論じてください。

